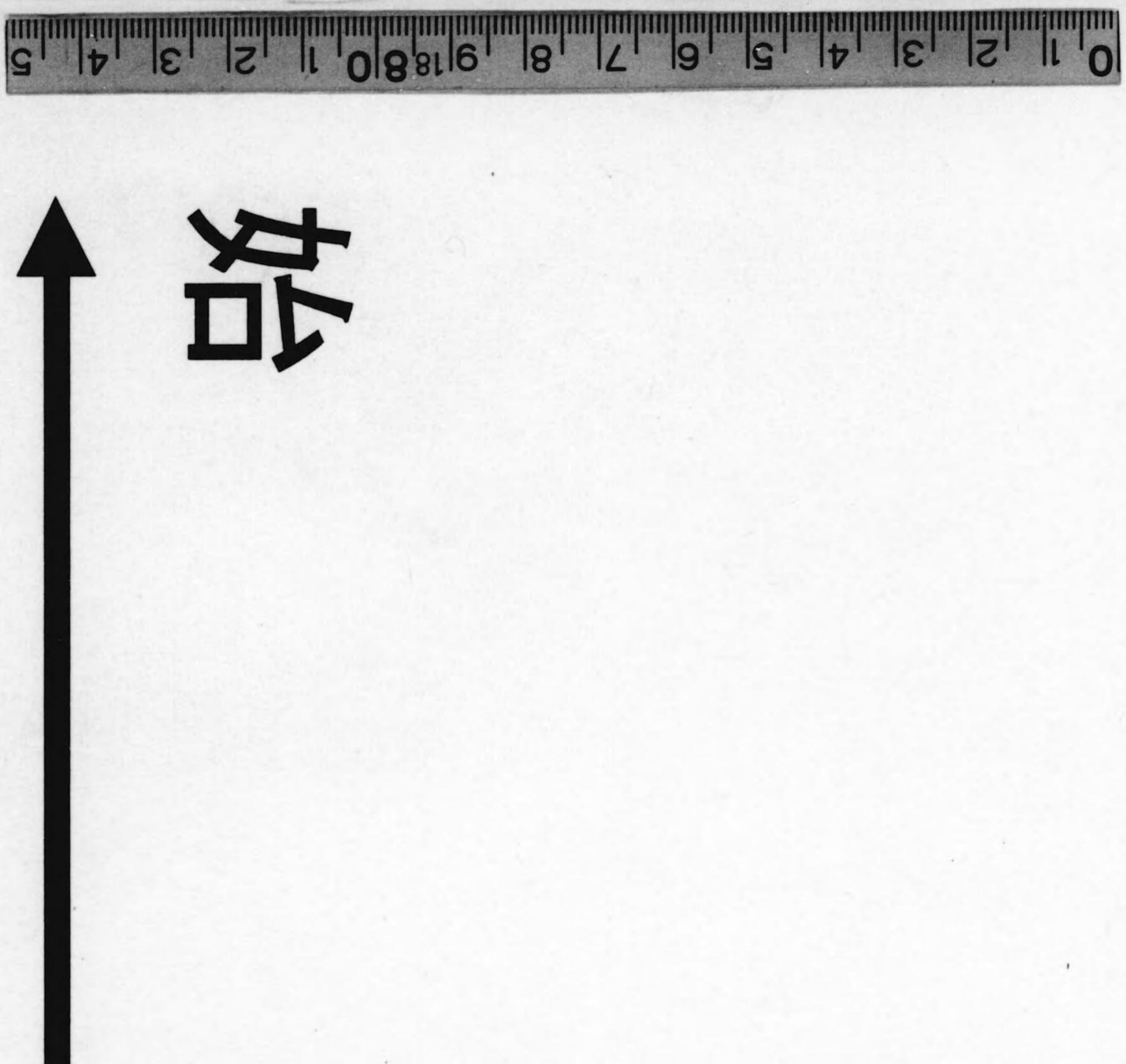

特 230
561

特230
561

聖天宮

第十八篇

諸名家の心靈觀

（上）

心靈科學研究會

特230
·561

心靈文庫

第十八篇

諸名家の心靈觀（上）

淺野和三郎編

發行所　心靈科學研究會

昭和十一年十月廿日

はしがき

われ〳〵心靈研究に志す者は、出來得る限り其の眼界を擴大し、知識を深めるの要があります。在來の宗教團體などが、漸く新らしき世界に倦かれて通用しなくなつたのは、主として自己獨善の城壁に立籠つて、世の進運に伴なはうとしなかつた點に存すと考へられます。

心靈を研究して、それから歸納されたところの神靈主義は、既に研究を基調とするから、そんな憂は決して無いと信じます。併しながら、心靈研究、神靈主義の包含する範圍は極めて博大、諸家の觀察も亦自から多岐多樣となりますから、洽ねくそれ等を參酌して、自己の資料とすべきで、苟も在來宗教などの陷つた弊を再び踏むべきではないと存じます。

此の篇收むるところのもの、上下合せて十一篇に過ぎませんが、以上の目的の一端に副ふことを得るならば、編者の幸之に過ぎないのであります。

昭和十六年八月

編纂者記

目次

生命と物質……（一）
余が靈魂論者となつた徑路……（一五）
私が死んだら！……（三一）
神靈主義の放送演講……（四五）
神靈主義とは何ぞ……（五五）

諸名家の心靈觀（上）

淺野和三郎譯

生命と物質

サー・オリヴァ・ロッジ

――一九三一年十月三十日ロンドン同人倶樂部にて講演――

われ〳〵人類は、複雜微妙を極めたる、宇宙の內部に於て、一の物質的肉體と結合して、存在して居るものであります。で、最初先づわれ〳〵の視聽を占領するものは、物質的存在で、それ等は悉く動いて居り、變化と發達の連續、所謂進化の道程を辿りつゝあることを感知します。此

等の物質的存在こそは、われ〳〵の感官に印象を與へ、われ〳〵が直接に觀測し得る、天地間唯一の存在であります。が、われ〳〵は直接の領會は有たないが、それが物體に與へる影響を觀て、間接にその存在を推定し得る、超物質的存在が、宇宙に澤山あることを知つて居ります。で、最近に至りて、われ〳〵はだん〴〵斯う考へるやうになりました——直接五感に訴へる物質よりも、遙かに澤山の、そして遙かに重要なる、超物質的存在が宇宙間にはあるらしいと。それ等が人間の五感に訴へない理由は、それ等が物質と結合してゐないからであります。それ等の或物は、物理の世界に屬するかも知れないが、しかし物質の世界には屬してゐない。近頃科學界の傾向は、次第々々に抽象體の本質の研究に向ひつゝあります。例へば時間と空間、エーテルと波、運動量、エネルギイの類、更に進んでは、一見物質と緣のなかりさうな彈性、電磁野、歪み、凝集性、引力、移動力などゝいふものであります。此等の何れをも、われ〳〵は充分に理解し得ない。われ〳〵はたゞ此等が、われ〳〵の周圍に働いてゐることを知る丈である。それ等が進化の法則に從ふか否かは、全然不明であるが、たゞそれ等の行動から察すれば、物質の世界を率ゐて、着々として生長發達を遂げしむべく働いてゐるやうに考へられるのであります。これは間接の結果を研究し、記錄する事によりて、ドウあつてもさう考へざるを得ないのであります。

さう言つた理論の開拓は、數學、物理學者に取りて絶好の壇場で、彼等は殆んど超人間的の能力を發揮して、それ等の法則や過程を査べ、驚くべき巧妙さを以て、すべてを數學の式に變へ、これに據りて、必然的に發生すべき結果を求め出すのであります。

斯うした筆法を以て研究の結果、彼等の或者は、

空間と時間とが、決して別々の存在でない

といふ確信に達しました。即ち時間空間は、或る一つの物をば、たゞ人間が二つの部分に分割して取扱つてゐるまでゞあるといふので、彼等はその根元の一つの物を『時・空』と呼んだり、『エーテル』と呼んだりしてる。そしてそのエーテルは、その中に撒布されてゐる物質的存在——之を小にすれば原子、之を大にすれば分子の集合體である所の日月、星辰、星雲等——よりも、遙かに重要なものだと考へてゐる。

由來或る物體の研究に全力を集中する人達は、その物體に對して無限の興味を催し、物質こそ存在のすべてゞあると推定するやうになり勝ちであります。例へば人體を研究する人が、比々としてその傾向を辿り、近頃の用語でいへば、いはゆる形態論者（ピヘーヒオリスト）になるの類であります。此等の論者は、人間一切の行動を、外界の刺戟による反射運動に歸せんとしますが、仕合はせなことに、

全部の醫學者が、之に贊成するに至りません。その中に時が來れば、現在よりも眞理の一層優れた表現形式に到達することにもなるでせう。

兎も角も現在として、われ〳〵はそれ〴〵の專門學者の大部分が、一致したところの結論を利用することにすれば良い。例へば天體の組織、及び進化の問題であるが、專門家のすべてが、枝葉の點に於て、多少の相違點を有するにしても、次のやうな諸點は、先づ定說と觀て良い。即ち宇宙の內部が、今猶ほ進化の道程に在ること、多くの太陽が今猶ほ構成の途中に在ること、人間の發見にかゝる、かの旋轉止まざる大銀河は、途方途轍もなく巨大なる星の集團であるが、しかしそれは物質的大宇宙の、ほんの一小部分を占むるに過ぎないこと、等であります。

われ〳〵の五感なるものは、ドウいふ理由があつてか、物質以外の何物をもわれ〳〵に敎へない。われ〳〵には電氣も磁氣も、又光線さへも判らない。たゞそれ等が物質の上に働きかける結果を、間接に知り得るに過ぎない。われ〳〵の眼は、光そのものを見る力すら有たない。たゞ光によりて照らさるゝ物體を觀得るだけである。即ちわれ〳〵の視るのは、太陽の光の中に踊る塵芥などで、塵芥がなければ、モウ盲人と同樣なのである。電流、磁野何れもその選に漏れない。單に物質の行爲を觀て、いろ〳〵測定を下す丈のものである。電流計の針の動きを、電流そのものだと思つてはならない。それはたゞ電流の一の符徵、一の目次であるに過ぎない。之を要するに、他のものゝ符徵となることが、一般に物質なるものゝ仕事であります。即ち全然物質から獨立せる或る働きを、われ〳〵の五感に表現してくれるのが、物質の役目なのであります。

私はこの考を、われ〳〵の所謂生物と稱するものにも適用したいと思ふ。われ〳〵は生命、又は心を直接に視ることはできない。われ〳〵はたゞ生命、又は心によりて活かされる、有機體の行動を研究し得るにとゞまる。お互が視得るのは、お互の機關のみであつて、その他は推定に過ぎない。その人の行爲を離れ、若しくはその人の放射する思想の波等を離れて、他人の思想を知ることは到底できない。私はこれが永久に變らざる眞理であるとは言はない。が、われ〳〵の現狀にありては、ドウあつてもさう認めざるを得ない。若しもわれ〳〵の五感にして、物體を視ないとすれば、われ〳〵は他に視得る何物もないのである。われ〳〵は色彩の美を觀賞するが、色とはそも〳〵何物か？　——畢竟たゞ

波動の連續

に過ぎない。われ〳〵は波の速さを、色として感知するに過ぎない。色といひ、美といひ、畢竟心の飜譯である。美術、音樂、文學、……悉く飜譯ならざるはない。それ等は物質に記錄を殘

し、若しくは物質に内在せしむることはできる。しかし美術の作品と言つたところで、それ自身は畫布（カンバス）の上の繪具であり、又は紙片の上の黑點であるにとゞまる。すべて此等のものゝ實體は、見えざる世界に存在する。

頭腦と言つたところで、畢竟その仕事は、周圍の有形の物體を表示してくれる丈のものである。物體の裏面に內在する實體は、之を推定するより外に道がないのであるが、これは最早頭腦の領分でなく、心の領分に屬する。風景を視、美術を視て、之を觀賞する者は汝自身である。美の觀念、計畫の觀念を有するものは汝自身であり、汝自身の中にこそ、希望も愛も宿るのである。物質的機關が之を有するのではない。その機關を造り上げたのは汝自身であつて、しばしの間之を汝自身の用途に供する。が、物質なるものは由來蜉蝣の質で、ソウ永くは續かない。だん〳〵消耗し、破損し、終に無用の長物となる。さうなれば汝は之を放棄する。物質的肉體なるものは、決して汝自身の一部分ではなかつたのだ。それは汝が自己表現の爲めに用ゐた一の道具で、仲間の者に相圖をしたり、又仲間の者から相圖を受取つたりするに使つたに過ぎない。肉體を棄てたと言つて、汝自身は少しも變らない。

私は生命と心との本質を知つてゐるとは、決して誇稱しない。が、それ等が物質の作用でない事だけは知つて居る。われ〳〵は、現在われ〳〵の仕事を遂行するに當り、物質を使用するのは事實だが、しかしわれ〳〵が縱令物質と離れた曉にも、依然として活動を續けること、物質的機關の破壞は、單にわれ〳〵の表現の仕方を變へる丈で、われ〳〵の實在には、全然無關係であることを確認すべき十二分の理由がある。成るほど物質を離れたものは、われ〳〵に對して、……少くともわれ〳〵の現在の五官に對して、何等明確なる印象を與へないことは事實である。彼等はわれ〳〵の圈外のものであるから、從つて其存在は兎角否定され易い。かの形態醫學者などは、しきりに分泌物又は藥物に對する有機體の反應などを査べ、その研究は微に入り細に入り、全く以て尊重に値するが、たゞ彼等が自己の受持の分野を越へ、僭越にも哲學的お談議を試みんとするのは閉口である。彼等は宇宙間のホンの一小部分、ホンの物質の方面のみに注意を拂つてゐるに過ぎない。一部分を以て哲理を談ずることは不可能である。われ〳〵は彼等の受持だけに對しては、敬意を表するが、彼等の哲理には一顧も與へる必要を感じない。哲學的結論を求める爲めには、もつと〳〵多くの材料の蒐集を必要とする。眞理の追究に際しては事物の全體に對して注意を拂はねばならぬ。物質的機構とて、もちろん無視してはならないが、しかし之を動かす

ところの無形の力は、更に一層大切である。何となれば、それは機構が破損した後にも、依然として存續するものであるから……。現在に於ては、科學の仕事は主として機構（メカニズム）の研究であります。少し以前までは物質的機構（マテリアルメカニズム）と言つた方が適當でした。イヤ現在でも、化學者や生物學者の大部は、主としてさうした方面に從事して居ます。が、物理學者は、最早物質的機構の研究のみに滿足しないで、放射とか、エーテルの諸現象とかを研究してゐる。そして現在ではファラデイ、マツクスウエル、アインスタイン、その他の大思想家の感化の下に、主として『時・空』又はエーテルの内に起る所の諸現象に、最大の關心を有つて居ります。

單に物質の働きを述べるにしても、物理的理論のみでは、最早到底完全でなくなつた。現代の物理學は、間斷なく空間の或る『野』（フィールド）に言及する。何となれば一切のエネルギイ、一切の活動は、實は根源を其所に有するからである。物理學の指示するところによれば、物質は惰性的のものので、最小の抵抗路を取り、これに働きかける力に對して、極度に正しく服從するものである。しかし、物質には何等の自發性がなく、超五感的の或る物の符號たるに過ぎない。そしてその或る物の存在は、物質の助けで人間に判るのであると。

果して然らば、われ〳〵の内部に、又宇宙の内部に、單にその一小部分のみが物質によりて表現され、その大部分は行方不明に殘されてゐるところの、何物かゞ存在すると言つたところで、決して怪むに足りない。そのものが知覺の領域外にあるといふ理由で、之を否定すべき必要は少しもないのである。われ〳〵は若し學術的の立派な手がゝりさへあれば、それ等が窮極の實在であり、物質的構成物よりも、遙に大なる持續性を有つてゐることを確認するに、何の躊躇をも要せぬのであります。

私の觀る所によれば、宇宙はドウあつても、

生命と心との一大貯藏池

であると思はれるのであります。即ち生命と心とは、空間の實在であつて、物質的天體、その他の存亡以外に超越し、よしや物質的宇宙が消滅することがあるとしても、依然としてその後まで存續するものであるといふのであります。爰で序でながら一言して置きますが、私自身は、物質的宇宙の消滅を信ずるものでありません。宇宙壞滅の豫言は、宇宙の内面に於て人知れず働きつゝある、超物質的存在を、全然無視した臆說に過ぎないから、殆んど一顧の價値がないと思ふのであります。

それはさて置き、生命と心とが、物質界を動かしつゝある方法は、まだ人智を以て充分に豫知

したり、計算したりすることはできません。ラプラスの計算器は、分子の一切の動作を豫知し、ある一つの瞬間に於ける彼等の位置、速度、加速度等を指示することができます。が、生物の行爲は、縱令一疋の蠅の行爲でも、そんな具合に計算することはできない。その自發性は、到底ラプラスの方程式にかゝらない。乃で物理學者は、止むなく生物を度外視し、之を自家の實驗室内の研究資料としないことにしてゐる。かの生物學者は生物を取扱ひますが、單に物質的機構といふ見地から、これを調査する丈で、從つて哲學的推理をするのには、とても充分でない。之に反して在來の宗教家は、全然物質を離れて了ひ、高尚な無形の存在物のみを取扱はうとします。從つてこれに用ゆる武器は、本能と直覺としかないことになるから、其所に非常な危險が伴なひます。漠然たる推量はできても、常に幾重かの雲霧が正體を遮つてゐる。

さて無形の心が、一たいどんな風に、有形の物體に働きかけるか？　といふに、この現象は間斷なく、われ〳〵の身邊に起りつゝあるものでありまして、心は一の組織的、又は整理的原理として、常に物を選りわけたり、排列したりします。若しも或る物體に、生命と心とが無くなれば、よしやその形骸は殘るにしても、常に分裂と混亂との途を辿ります。試みに人の住まない空屋を觀るがよい。見る〳〵中に建物は崩壞し、塵芥は堆積して、その機能を失墜して行きます。

これに反して生命と心とが働けば、秩序法則は回復され、すべてのものが有機的の作用を營み、地震とか、旋風とか言つた、無機的の無茶な力でも加はらなければ、立派にその能力を發揮して行きます。生命の保護の下にあればこそ、一本の樹木だつて、太陽熱を利用して發育を遂げたり、酸素を發生したりする。生命ヌキの枯木には、百の太陽も利用の途がない。又生命の作用があればこそ、混沌たる蠟塊が蜂巣と化し、落々たる石塊が、堂々たる堂塔と現はれ、更に心の働きを以て、美の要素を加へて行く。秩序と美とのある所には、必ず心の計畫的活動を認めます。心の働きの加はらざる仕事は、しば〳〵無機物の世界に見出されますが、大體それは無秩序と混亂との連續に終ります。

設計（デザイン）のいかに大切であるかは、建物の造營に當りて、實によく判ります。等量の勞力を用ゐて、或るものは美化し、或るものは醜化します。これは皆設計の結果であります。われ〳〵は矢張り設計らしいものを、鳥の羽毛、虫の翼、結晶體の構成等にも見出し得ないでせうか？　無論その設計は奥深いもので、人間の場合のやうに、明瞭には判りません。何れもたゞ天然自然に出來上るやうに見えます。が、畢竟彼等の構成に對して、窮極に於て責任を有する、一つの『心』

が存在することを、最も有力に物語りはしないでありませうか？

最後に自分は、何故に神學が百尺竿頭一歩をすゝめて、科學と提携するに至らないかを考へて見ますと、これには然るべき理由がありさうです。詮ずる所神學は、途中一切の階段をヌキにして、何も彼も神の力に歸して了つて、涼しい顏をして、口を拭つて澄まして居たいといふのでせう。が、こいつはあまりにも無責任な心掛でせう。われ〳〵人類は、いかなる方法で、造化の働きが營まるゝかを知るべき特權を有する、科學者の最大任務は、所謂大自然の機構の詳細を探知し、その目的の那邊にあるかを究明することである。すべての結果には、必ずその源因がある。人類としては、できる丈自然界に起る諸現象の手續を指摘し、結果の因りて生じた所以を究明して行くべきで、それができなければ、人類の價値は大いに下落を免れない。

さればと言つて、人間の科學が、全部造化の祕奥を究明し盡すものとも思はれない。成るほど人間にだつて、ある程度の創造能力はあります。詩歌、戯曲、繪畫、彫刻、……これ等は小規模ながら、ある一つの創造といへば言ひ得る。何となれば前に存在しなかつたものが、人間の力で新たに一の定形を爲すに至つたのであるから……。で、不完全ながらも、人間は之を手がゝりとして、宇宙内部に起る創造の何物たるかを想像することができます。たゞ爰で忘れてならぬことは、技術者が偉大であればあるほど、その創作の内に自己を隱して了ふことであります。われわれはホーマー、沙翁等の人物につきて、殆んど知る所がない。人間界の創造者にして、すでに然りとすれば、宇宙の創造者の仕事のいかに隱微深奥であるかは、察知すべきではないか。爰で宗教的精神の發露が、必然的に免れないのであります。

科學は探り究め、宗教は敬ひ拜む。筋は違ふが、どちらにも勘考の餘地がある。若しわれ〳〵が兩者の目的と、手段とをゴッチャにすれば、其所に混雜が起り、爭鬪が伴なふことは明らかである。乃で一部の人達は、ひたすら兩者を引離すことによりて、其弊害から脱れんとしますが、自分はそれに贊同し得ない。若しもわれ〳〵にして、すべてを統一的精神を以て觀ることができれば、現在よりは確かにより落ついた、そしてより高尚な哲學的規準に達し得ると思ふ。

單に物理學の天地に於てすら、其所に不可思議の存在がある。われ〳〵は之を波と呼んだり、ブシイと呼んだりしてゐるが、それが何物かは何人も知らない。私としては、これ等のものが恐らくは生命と心との一表現であり、それ等のお蔭で、心が物質の世界に働きかけ、或る程度之を指導し得るのではないかと推定したく考へてゐる。この推定の當否は何れにもせよ、其所に無形

の存在物が儼存すること丈は、ドウあつても確認せざるを得ない。

之を要するに目に見えざる宇宙こそ、それが眞の實在で、われ〳〵のまことの本籍は其所に在り、われ〳〵もいつかは其所に戻るのである。物質は物質として、感謝の心を以て有意義に之を使ひこなすべきだが、しかし目に見えざる無形の世界は、尙ほ一層大切で、とりも直さず、それがわれ〳〵の研究、われ〳〵の希望の、汲めどもつきぬ寶藏なのである。こゝに科學と宗教との合流の理由が存在すると思考する……。（昭和七、二）

余が靈魂論者につなた徑路

――ウオルタアス主筆の大膽率直な告白

西洋の操觚者中にはウオルタアス氏のやうな快男子が居る。氏は大英國中で一番きれいな新聞と謳はるゝ「マンチエスタア・セイテイニユース紙」の主筆ですが、先頃率直大膽に自分が靈魂論者になつた徑路を紙上に發表して居る。腐つたと言つても矢張鯛だ。英國人中にはまだ見上げた氣慨が殘つてゐる。暑さの最中だから斯んなものでも料理して一服の清凉劑として、讀者にすゝめる……。――記者。

一、氣まぐれ者

……氣まぐれ者は、世間からひどい目に逢はされるものと、古來相場がきまつてゐる。ソクラテスがさうだつた。彼はジユピタア神が、オリムパスに座ないなどゝ斷言して、雷霆を鳴らし

て、自分では得意であつたが、貧乏の擧句、最後に毒を仰いで死んだ。コロムバスもその亞流で、グン〳〵海を進めば、新大陸が發見されるなどゝいふ想像を逞しうしたので、僧侶その他、當時の所謂識者達から物騷な男と考へられた。

もつといけない氣まぐれ者は、ガリレオ、ブルーノー、ケプラアなどゝいふ連中で、大地は太陽の周圍を運行するなどゝ、飛んでもない事を言ひ出したので、當然大衆の袋叩きにされた。ロージャー・ベーコンだの、ヨハン・ファウストだのは、自分では有益な科學的發見をしたつもりであつたが、世間の眼から見れば、正に惡魔の弟子入りをしたもので、（丁度今日の心靈研究と同樣に）從つて極端な惡名を謳はれた。要するに何れの時代に於ても、正しきものは常に多數黨で、少數者の意見の通るのは、次の時代と相場がきまつてゐる。

私もどうやら、此等氣まぐれ者の席末を汚す人間らしい。何となれば、私は極めて評判のわるい、心靈問題とかゝり合ひを附けて了つたから……。無論私だつて、最初からの心靈論者でない。只の一度も心靈現象に接しなかつた間は、至極無事で、あんな下らないものに引つかゝる人間の氣が知れない位に思つて居た。ところが現在では、ドウやらロッジ、ドイル、クルツクス、ウオレエスなどの側に立ちて、靈魂說ほど大なる眞理を包藏してゐる教義は、天下にないと考へてゐる。要するに教會が口頭丈で言つてゐる所を、こちらは事實で證明しようとする、氣マグレ者なのである。

いふ迄もなく、私の信仰は、全然事實の上に立脚してゐる。教理、經典、獨斷――これ等のものは、少しも私の身にはしみない。私に取りては實地に見、聞き、感じ、又知り得るものでなければ信ぜられない。私の信賴する事實は、悉く直接のもので、受け賣りでは承知ができない。其所へ行くとロッジ、ドイル、クルツクス、ウオレエスなどいふ連中の主張は、最初から甚だ私の氣に入つた。彼等は悉く、自分自身の直接手にかけた證據物件をかつぎ出して、論陣を張つてゐた。之に反してその反對論者は、最初から心靈事實を求めようとせず、よし求めても、猶ほそれを發見し得ない連中のみであつた。

知識がないから否定するといふ道理は、何所からも生れない。事實は單に他の事實を以て打ち壞し得る。

幸か不幸か、私も直接の心靈事實にぶつかつた一人である。しかも嚴正なる批判の結果、讀心術や、潛在意識では、到底說明のつき兼ねるシロモノにしば〳〵逢着したのである。

愛に一例を擧げる。私は靈魂說の否定論者達が、彼等一流の筆法で、何と之を說明するか、謹

んで拜聽したいのである。

二、死者の來訪

爰に私の知つてゐる機械工に、リンフオースといふものがある。夫妻の間に、トマスと呼ぶ少年があつた。トマスはトレブルの美聲を有つてゐるので、音樂好きのハムモンド牧師の眼にとまり、音樂者として養成されることになつた。その成績は甚だ宜しく、秋の感謝祭に歌ふべき、讃美歌の獨唱を受持つことに決められた。

その中牧師は暑中休暇で海岸に出掛けた。

二日ほど過ぎた夜中に、トマスの寢室に導く階段の邊で、足音がきこえたので、母親は眼をさまし、びつくりして良人を呼び起した。良人は別に何等の物音をも耳にしなかつたが、妻の恐怖を和めるべく、兎も角も小供の室へ行つて査べた。しかし小供はスヤ〳〵と熟睡して居るので、安心して戻つて來た。そしてすぐに眠についた。――これが良人の直話である。

母親は尙ほ眠らずに居ると、間もなく、小供が何やらブツ〳〵言つてゐる。耳をすませば、何うしても、トマスが何人かと會談を交へてゐるらしい。音聲はトマスのものしか聞えぬが、質問したり、又質問に應へたりする樣子から察すれば、其所に相手が居るとしか思はれなかつたさうである。さうする中に、長い會話が終り、階段を降る足音が、今度もはつきり聞えた。女房は耐らなくなつて、熟睡中の良人を搖り起した。

二度まで呼び起された良人は、可なり不機嫌な顏をして、隈なく家中を搜しまはつたが、格別眼にとまる何物もなかつた。小供は不相變睡つて居たが、たゞ寢具を蹴放して居るところを見ると、たしかに安眠はしてゐなかつた。

『お前達二人は惡夢に魘されたに相違ない。』と、彼はつぶやいた。『この上俺の安眠を妨げてくれるな！』

やがて夜が明け離れ、父親は例によりて早く出勤した。しばらく過ぎてから、子供はさも睡さうな顏をして、寢室から降りて來た。母親は懸念らしく訊ねた。――

『お前は何所か軀の加減でも惡くはないのかい？』

『ちツとも惡くはないよ。たゞ夜中に起されたものだから、僕睡たくてしやうがない……。』

『夜中に呼び起されたつて？　誰に起されたの？』

『だつてさうぢやないか、　お母さん、――　僕あんなに遲く來た人に逢はせてもらつちや厭だ

……。』

『これトムミイ、お前は何を言つてるのかい？　夜中に來たものなどは一人もありアしない……。』

『何を言つてゐるの、お母さん！』　と、トムミイは不平らしく母親をたしなめた。『夜中にハムモンドさんが僕の寢室に來て、しきりに讃美歌の事を言つてたぢやないの。しつかり練習して置いて、うまく歌はなければ可けないと、そりあしつこく、そんなことを僕に言つてゐた。僕はきツとさうすると請合つて置いたが、何度も〳〵同一事をくりかへして、やつとの事で出て行つたの。そりあさうとお母さん、ハムモンドさんの可笑な風たらなかつたよ。全身ビショ〳〵に濡れて、光つて居るのだもの……。』

母親は蒼白になつて、それつきり口を噤んで了つた。

夜になつてから、父親は市から戻つて來た。從つて、もちろんトムミイの不思議な話を、まだ知らずに居たのである。家に入るや否や、彼の最初の言葉は斯うだつた。――

『ハムモンドは、飛んだことになつたやうだね……。』

『何んでございますつて？』

と、女房は驚いて訊ねた。

『ぢやお前はまだ知らないと見えるナ、ハムモンドさんは、昨日水泳中に溺死されたさうだ……。』

物語はたゞこれ丈のもので、私が父親と、母親と、悴との三人から、別々にきいたところを綴り合はしたものに過ぎない。これは全體偶然の暗合か？　それとも根も葉もない幻想か？　それとも又一篇の架空譚か？　もし架空譚とすれば、三人は何の必要ありて、かゝる創作に苦心したのであるか？――私はこの問題の解決も、懷疑論者に一任する。心靈學說をぬきにして、何と解釋ができるか、私は是非それを拜聽したいと思つて居る。

三、眞の靈魂論者とその大敵

この種の實例は、幾百となく私の手元にあるが、今はしばらく差控へる。大方の諸君子の中には、かゝる問題をきかれて不快に、若くは不氣味に感ぜらるゝ方も、多いであらうと思ふが、私自身としては、此等を手がゝりとして、靈魂論者の仲間入りをしたことを、毫も悔ゆる所存はない。就中私は『生命』の眞義を悟らして貰つたことを難有いと思ふ。今日の私には、『生命』は

僅に五七十年の現世の生命のことではない。努力、失敗、苦痛――それが現世の生命であるが、眞の大生命はそんなものではない。眞の生命が過去、現在、未來に在りて、首尾聯關して居るといふところに、爰に初めて生命の目標、生命の論理的目的が發生する。それなしに何の奮鬪、何の努力の甲斐があるか？　宗教は言葉を以て、この事を吾人に告げた。（從つてこれを信ずると否とは、吾人の自由である。）しかし近代心靈研究は、事實を以てこの事を吾人に證明した。（從つて之を信ぜざるは精神的自殺である。）これが人類に取りての、最大禍祉でなくて何であらう！

尙ほ私は靈魂說に深入りしたお蔭を以て、勇敢なる紳士淑女の群――その深遠偉大なる知識と經驗とを以て、眞に活きた、眞に崇高な働きをしつゝある所の、當代の名士と接觸するの光榮を擔ふことを獲た。それ等の人達の中で、私は眞先きにサー・アーサア・コナンドイルを擧げる。私はこの人ほど眞摯な、この人ほど高潔な人格者に、生來未だ曾て逢つたことがない。彼は最高の眞理の爲めには、一切の世間的利益を棒に振ることを辭せざる人物である。

私が彼を知つたのは、彼が年若き醫者として、文壇に立脚地を占めかけた時代で、すでに『リツピンコツト誌』に、『ザ・サイン・オブ・フオーア』を發表して居た。私は之を一讀して、一方ならずその奇才に打たれた。犯罪の祕密に對する取扱方が、いかにも巧妙で、新規で、私はボ

ーの作品に讀み耽つてからこの方、初めて斯んな傑作に接したやうに感じた。倖にも私はこの若き作者に接觸するの機會に接し、右の作品を、私の主宰せる新聞紙上に揭載を許してもらひたいと申込んだ。當時何より困つたのは、支拂ふべき原稿料の輕少なことであつた。ところが著者からは、早速たつた四行の返信が來た。『御希望ならば、御勝手に御使ひください……。』――これがその返書の書き出しであつた。長い間の私の文壇生活中、これほど安い買物をしたことは、前後に匹儔がなかつた。

この一小事件が緣となつて、その後私は、この大文豪の經歷を、常に甚大の興味を以て注視して居たが、私が卿と親しく友垣を結ぶまでには、荏苒として多くの歲月が流れた。さうする中に、彼は靈魂問題の戰士として、陣頭に立つことになつた。彼は敢然として、雲霞の如き懷疑者、皮肉屋、時とすれば、讒謗罵詈者の群を向ふにまはし、眞理を眞理として明言直語し、われ等同胞の爲めに時間と、才能と、財力とのすべてをさゝげて、顧慮するところがなかつた。彼は正しく大人物であり、大學者であり、大戰鬪者であり、又大先覺者であつた。彼のなしとげた重大使命は、たしかに今後幾世紀を通じて鳴り響くに相違ない。私の彼に對する憧憬の念は、爰にいたりて最高潮に達した。私は彼の隨從者の一人たることを、無上の誇りと感ずる。私達が同一

研究を、同時に開始した時に、同一都市に住んで居たといふことは、偶然の事柄ではなかつたが、ちよつと不思議でないでもない。

尙ほ不思議であつたのは、殆んど同一時代に、同一市内に、サア・オリヴア・ロッジが住居を構へて居たことであつた。彼は誠に堂々たる風采の所有者で、高く秀でたる前額は、いかにその智腦の豐かなるかを示すに充分であつた。彼は科學者であり、哲學者であり、同時に又大學の總長であり、彼の屢〻試むる講演は、いつも私に最大の感銘を與へた。その凛々たる音聲と、その明快なる發音とは、殆んど不可抗の力を以て聽者を壓したが、この人が心靈問題の道樂者であること（多くの世人はさう信じて居る！）を私が知つたは、餘ほど後のことであつた。それから後に何が起つたかは、天下周知の事實で、爰に繰りかへす要がない。彼は何所までも眞劍に、何所までも着實堅固に前進をつゞけ、ポンチ記者の冷嘲や、知つたか振りの群小の攻擊を、馬耳東風ときゝ流して居る。

此等の人達は、今後に於ても、依然として自己の善と信ずる仕事をつゞけ、自己の天職を全うし、別にその報酬を求めようともせず、又恐らく報酬を獲ることなくして、一生を終るのであらう。事によると彼等は、その時代の笑はれ者として終るかも知れない——が、それが何の顧慮に値しよう？　それは古今一切の先覺者達——カアライルの所謂光明運搬者達（ライト・ブリンガース）——の免れ難き運命であつた。

『一應御尤だが』と、批評家はこの際叫ぶであらう。『しかし靈魂說の畠には、隨分詐術だの、ゴマカシだのが多いですね。從來そんな連中の摘發された實例は、隨分澤山あるやうですね。』——これは私も正にその通りであると承認する。私には何故もつと餘計にそんなものが出なかつたかゞ、寧ろ不思議な位なものである。凡そ靈魂問題ほど、ヤマ師連に好機會を與へ、不逞の徒に向つて、心弱き迷信者をたぶらすべき好餌を供給するものは、天下に類がない。私自身も從來何回か、さうした詐術漢、惡德漢の面皮を剝くの機會に接した。此等の似而非（えせ）靈魂論者こそは、實にわれ〳〵の間の獅子身中の虫なのである。彼等は眞の靈魂論者でも何でもない。自己の醜惡なる目的を達するの手段として、しか自稱するものに過ぎない。

私は數年前、一人の自稱靈媒夫人に就きて、面白い實驗を試みたことがある。彼女は私を訪問して、しきりに私の沙翁通であることを稱讃し、何やら靈界から、私に對する重要な啓示があるといふのである。私は最初から、こいつは少し臭いと睨んだ。その不當なお世辭が、いかにも空〻しく感じられたのである。

最初少しばかり卓子傾斜の實驗を試みてから、今度は恍惚狀態に入りて、エリザベス朝の戯曲につきて、流暢な講話を始め、ベン・ジョンソンだの、マアメエド・クヴアーンだのゝ話が出た。さうする中に、沙翁自身が憑つて來て、靈媒の口を使つて、談話を始めたのだから耐らない。右の沙翁は、何ういふ仔細で、彼が十四行詩を書きはじめたかを説明し、沙翁學者間の問題の種である、かの『黑眼勝ちの女』に就きて、斯く説明した。――

『あの黑眼勝ちの女』といふは、わたしの愛人で、美貌と才藝のもちぬしであつた。彼女の本名はマリア・メドウと言つて、わたしの芝居で、しば〳〵女主人公の役をつとめた。……。』

『モシ〳〵沙翁さん』と、私は自席から起ちあがつて言つた。『私は嘘や冗談がきらひだから、露骨に申上げるが、あなたは大嘘言家です。あなたの時代に、婦人の役者は一人も居りませんでした。あなたがお歿なりになつて、餘ほど經つてから、初めて正眞の女優が舞臺に立ちました。』

私がさういふと、靈媒はすぐに覺醒した。仍て私は扉を開けてやつて、彼女が出て行くにまかせた。可哀さうに彼女は、それつきり謝禮の請求をしに來なかつた。

四、彼岸の消息

われ〳〵は、靈魂問題の門外漢から、よく斯んな叱言をきく。――

『靈魂研究も惡くはないが、ドウも靈界の通信といふ奴は、內容のない下らないものばかりで困る。』

一應尤もらしくもあるが、私の視るところによれば、從來、とても交通はできないものと考へられて居た靈界から、何等かの通信を受けるといふ事は、決して小問題でない。それ丈で從來成しとげられた一切の發明、大切な發見の何れよりも驚歎に値する。たとへ『然り』か『否』か位の簡單な通信であつて、それが他界からの通信であることが確かであれば、實に天下の一大事ではないか！

が、すべての靈界通信は、彼等の述ぶるが如く、果してその內容が貧弱であるか？　自分自身で、靈界からの通信を受けたことのない者が、そんなことを言ふのであつて、實地に通信を受けた者は、決してさうは考へない。何人が觀ても、ヴエール・オウエン、又はステイントン・モーゼスなどの受けた通信の內容が、果して貧弱であり、空疎であらうか？　疑ふ者は虛心坦懷に、その內容を調査するがよい。何れも書物となつて、すべての人の閲讀に提供されてゐる。只困るのは公開することのできない、祕密の私的通信である。そればかりは、何と言はれても、遺憾な

がら公開する譯には行かない。又ある種の靈界通信は、餘りに先驗的の性質を有つてゐて、假令公開しても、一般讀者には齒ぶしが立たない。之を要するに、靈界通信にいろ〳〵の難癖をつけるのは、多くは難癖の爲めの難癖であつて、熱誠なる心靈現象の研究者の、豫想だもせぬ事柄なのである。

私はツイ先日、一人の有名なマンチエスタアの牧師と、滑稽きはまる會見を遂げた。彼はその當局から、此等の『惡魔的研究』に關係することを嚴禁されて居たので、當然心靈問題につきての、純然たる門外漢であつた。それにも係らず、彼は心靈研究の不屆千萬な所以を、眞向上段から攻擊した文章を某週報に揭げ、最後に斯う結論した。

『予は心靈問題の爲に、恐るべき不幸災厄の數々に遭遇した人達の、悲慘なる實例を澤山知つて居る。若しそれを聽きたい方があつたら、遠慮なく私のところへ申込んで貰ひたい。』

これは筆のアヤから書き加へた、一場の放言に過ぎなかつた。が、右の週報の主筆は、神ならぬ身の、さうは思はなかつた。そんな實例は、きつと讀者に受けるに相違なからうと考へ、是非その續きを書いて貰ひたいと牧師に申込んだ。驚いたのは當人の牧師で、蒼い顏をして私の許へかけ込んで來た。

『實は私は、ホンの聞き嚙りで、あのやうに書いた丈で、實際の話は知らないのです。』と、彼は正直に告白した。『若しあなたのお手許に、良い材料がお有りでしたら、恐縮ですが、それを拜借したいもので……。』

私は率直に、心靈問題の爲に、不幸災厄にでつくはすなどゝいふ話は、まつかな嘘だといふことを說明したので、牧師の失望は、見るも氣の毒な位であつた。たうとう悲慘なる實例の記事は、永久に執筆されずに終つた。その癖、もちろん前記の攻擊文の訂正も發表されなかつた。斯うして心靈研究は、今猶ほ依然として、新聞雜誌から繼子扱ひを受けつゝある。

全世界の人々は、轉瞬の休みなしに、人生の大道を、先きへ〳〵と進みつゝある。前面には、霧深き地平線が横たはつてゐて、稀にそこから、一條のかすかな光明が、チラリと閃くこともあるが、殆どすべての人は、其の彼岸に何物が伏在するかを知らずに居る。そして徒らに不審の眉をひそめつゝ、一人々々境界線を越えて行くのみで、再び戻つて來るものはない。哲學者、詩人、科學者、技術者、何れも皆旅の道伴れで、しきりに前途に控へる、『未知の世界』の樣子をさぐらうとしてゐるが、なか〳〵思ふやうに行かないで困つてゐる。果して然らば、若し爰に彼等の中のある者が、その未知の世界から發する、ある光明を認め、又はその世界から送らるゝ、

あの慰めの消息に接したといふなら、少くともそれは、溫き同情を以て、耳を傾くべきではないだらうか？　何となれば、彼は行きて返らぬ無數の道伴れに向つて、何等かの助力を捧ぐべく、全力をつくしつゝある人であるのだから……。（『ゼ・ツウ・ウアールズ』誌五月二十日號から、昭和二、九）

私が死んだら！

左記は昨年十一月一日の晩に、マンチエスタア中央心靈教會（セントラル・スピリチュアリスト・チアルチ）に於て、アーネスト・ダブルユー・オーテン氏が試みたる講演の大要で、御承知の通り、同氏は週刊心靈雜誌『ザ・ツウ・ワアールズ』の主筆であります。『私が死んだら』――恐らくこれは何人の心にも、早晩浮び出るところの、眞面目な問題であつて、世界の名ある心靈學者が、これについて何を言ふかは、たしかに讀者の興味を惹く事柄と信じられます。――記者

一、結婚でさへも樂しい

近頃『デリー・エキスプレス』その他の新聞紙を見ますと、『私が死んだら』といふ標題で、多くの寄書が掲載されてありますが、私の觀るところによれば、何れも餘りに貧弱、餘りに淺

薄、たゞの一人として、行つて損のない結構な世界が、現世界の彼岸に、立派に存在することを、はッきり自覚してゐるものがない。及ばずながら私は、皆さまの御參考までに、いはゆる死の彼方に、何んな境涯が横はるか、一つ自問自答を試みて見ようと考へるのであります。請合つてこの事は、愼重な考慮を要する問題で、人生に起るところの、いかなる他の問題に比べても、その點に於て毫も遜色はないと存じます。但し問題が重大であるからと言つても、皆樣は決して陰氣な、お六ケしいお顏をなさるには及びません。細心の注意をこれに拂ふことは大切ですが、しかしそれが人生に於ける、最も幸福な出來事でないとは、何うして申されませう。人生の大切なる事件は、ことごとく愼重な考慮を要します。しかしその大部分は、皆樂しいものです。結婚でさへもさうではありませんか！

あなた方は、死んだ時に、自分がどんな姿になるものか、それを考へて見たことはございませんか？　もちろん死後の姿は、現在有つてゐる肉の塊ではあり得ないに決つてゐます。腦、神經、筋肉、骨骼などは、何等かの形にかはつて大地に復歸し、恐らくやがて他の生物の形態を取るでありませう。それが老後に於て、徐々として幾年かに亙りて消耗して行くか、それとも一とかたまりを爲して、棺桶に收められるゝかは分りませんが、何れにしても、あなた方の肉體の一切の分子が、いつかは他のものに變形することは疑はれません。

然る上は、私が死ねば、私といふものが、私の物質的肉體ではないに決つてゐます。それなら物質的でないどんなものが、私に存在しますか？　物質的でないものは、寸法を測つたり、目方を量つたりすることが能きない。同時に肉眼にも認められない。外でもないそれは記憶である、慾望である、愛情である、向上心である。――以上のものが存在しなければ、あなた方には、男子たる資格も、女子たる資格も備はりはしません。いふまでもなく、物質的肉體もなか〳〵大切であります。肉體の機關に缺陷でもあれば、自己表現の上に支障を來し、その結果記憶が失せたり、自覺が不充分であつたり、知識、愛情、向上心等がとぼしかつたりします。物質と精神との聯鎖は事の外微妙であります。

二、夢

あなた方は、睡眠中に夢を見たことがおありですか？　朝來眠が破れて、意識の最初の閃きが戻つた時に、あなた方は、睡眠中の記憶の名殘が、かすかに存在することにお氣がつかるゝでせう。その時あなた方は、家人に向ひて仰ッしやるでせう。――『私は何やら夢を見たが、それが

何であつたかは今想ひ出せない……。』これは果して何を物語りますか？　私の考ふるところによれば、覺醒の瞬間に、あなた方が有てる二つの方面、物質的と、超物質的との二つの世界は、ちよつと互に接觸するのです。肉體の記憶と、心靈の記憶とが、互に手と手を握り合ふのです。が、現實の意識が戻ると共に、兩者は再び離れ〳〵になつて了ふ。マイヤースは彼の大著人間の個性の中で、夢に就きて論じてゐますが、私の觀るところでは、人の意識を分析して、こゝまで精到をきはめたものは絶無であると思はれます。その中で彼は、『何人も夢見ることなしには眠れない。』と言ひ切つて居ります。あなた方が自分の見た夢を記憶してゐないのは、夢を見ないといふ證據にはなりません。催眠現象を考察してもよく判りますが、人間には二種類の記憶があります。一は現物質世界の生活に關係し、他は超物質世界の生活に關係します。何ちらもそれ自身に於て獨立したものであり、そしてあなた方がこの世界から、彼の世界に移り行くにあたりては、こちらの記憶を、あちらまで持つて行くのです。

で、あなた方がいよ〳〵死んで、彼の世に入つた時、その死後の世界の記憶なるものは、兩方の記憶――現世の記憶と超現實の世界の記憶――との合併したもので、餘ほど複雜して居るに相違ありません。われ〳〵は靈界通信を試みるに當り、死者の靈魂と、生前の當人との間に、しば

しば非常な懸隔があることを發見して惑ひますが、右の理窟に照らせば、さもあるべき事と肯かれます。われ〳〵は生前のあなた方のみを知るが、死後のあなた方は生れかはり、死にかはりたる幾代幾十代の記憶の合併體であります。かるが故に、あなた方の靈魂が、地上の知己朋友と交通するに當りては、自分自身の人格を、丁度都合のよいやうに分割する必要を生じ、それが案外困難なる點であるらしく見受けられるのです。

この種の問題は、科學的の方法で、催眠實驗を試みると、幾多の手がゝりが得られます。ある人達は、しば〳〵自分の意思を以て睡眠狀態に入ります。それは肉體的に無意識の睡眠でなく、アンドリュ・ジャクスン・デヴイスの所謂高級睡眠――軀を地上に殘して置いて、ある程度他の世界との交通を試みるやり方であります。ボールは第三天國に昇つたことを物語つてゐますが、それは何を意味しますか？　他にも又、肉體を脱け出でゝ、神と共に在つたことを物語るものがありますが、それは一體何事を物語ります？　この種の事柄は、人々が想像するよりも、案外世間に實例があります。私自身は靈魂遊離の實地經驗ある、可なり多數の人達に會つて居ります。たゞそれ等の人達は、めつたにその事を他に漏らしません。この人が世界有數の靈能者の一人であらうとは、壁一重の隣りに住む人々さへ知らずに居る場合が、珍らしくありません。誰しも理

不盡の嘲笑や、憎惡を買ひたくないのは人情です。が、幸ひ近年に及びて、次第々々に、心靈能力の存在を認むる機運がめぐつて來て、靈能者が、淡泊にその經驗を告白する場合が殖えたことは、まことに慶賀すべき事柄であります。

三、靈界の裁判

取り敢へず私はこゝに率先して、自分自身の靈的經驗を開陳することに致しませう。それは極めて明瞭に、私の記憶に印象されて居ります。他のいかなる地上の經驗も、私が兩三度自己の肉體の外に脱出してみた時の經驗ほど、はつきり腦裡に浸み込んでは居ない位であります。私はこの肉體が、寢臺に横はつてゐるのを、あり〳〵と見ました。頰の色は恍惚狀態に入つた結果として蒼白ですが、呼吸は規則正しく力強く聞えます。そんな場合に、自分の軀は丁度他人の軀のやうに思はれ、自分自身は、その上をフワ〳〵漂ひます。軀と自分とを繋げる生命の紐もよく見えます。そんな時の自分は、この世界が一瞬間に燃えつくされて、灰燼に歸したところで、さつぱり構ふことはないといふやうな氣分がします。

こゝで皆樣に篤と諒解して戴きたいことは、心靈說がそれ自身に於て、一の敎義でも何でもないことであります。それには何々の信仰個條などは、一つも附いて居りません。自身靈界と直接接觸して、受賣りならざる、精神的自覺を起すにあらずんば、世界中の宗敎を鵜呑みにしたところで、その人は心靈論者ではないのであります。自覺の有無、體驗の有無――それが眞の心靈家と、否との區別點であります。われ〳〵は、中身なしの殼を以て、人類を養ふことは能きません。是非とも靈的自我を養ふところの實質ある、ある物を要します。

さて私が死んだ時に、何んな事にぶつつかるか？――恐らく私は、人々の所謂來世と稱する世界に於て、急に自我意識に目覺め、振りかへつて、今まで自分と同居した肉體を眺めるでありませう。病の爲めに、頰の肉は恐らく落ちて居る……。色つやは極めて惡るい……。屍體の枕邊には、誰かゞ悲んで泣いてゐる。私は恐らく、泣くのはつまらないと思ふに相違ない。同時に私は、生前誰かに迷惑をかけたことを想ひ出して、暫時後悔の念にとざゝれるでもありませう。さてそれから何うするであらうか？　何所かの土地へ旅行した時に、誰しも第一に知人の許を訪れようとするでありませうが、靈界に於ける自分も、先づ生前の知人は居ないかと、それを求むる氣になるだらうと考へます。私は生前靈界旅行をした時にも、それ等の人々に逢つてゐるくらゐでありますから、自分が死んだ上は、尙更の事と思ひます。私は恐らく獨語をいふでせう。――

『自分はこの土地の案内はあまり知らない。何事も自分の先輩に任せることにしよう……。』

不案内の土地に行つた旅客は、誰しもこの筆法を用ゐます。するとそれ等の知人達は、いろ〳〵と自分の面倒を見て、一時も早く新らしい土地に馴染ませるやうに取り計らつてくれます。多分私は長い間の病のせゐで、衰弱の氣味がありませうから、活動を起す前には、取り敢へずしばし休養する必要があるかも知れません。私は又生前何等かの罪の負債を作つて居るので、その償却をせねばなりますまい。自分が果すべくして、生前遂にそれを果さずにゐた何かの責務――神の裁判所は、恐らくこれに對する令狀を執行するのでありませうが、無論私はそれを回避するやうな眞似はいたしません。誰が何を申しませうが、私は先づそれを果してしまひます。それから私は自分自身の一切の行爲に對する、總勘定の決算に潔く應じます。思ふに誰しも幽界に入りて、生前の總決算をする場合には、心の底から後悔するやうな事件が、澤山あることに氣がつくに相違ありません。羞かしさに顏を赧らめるやうな事柄も、一つや二つはあるでせう。いかなる人でも、差引勘定して多少の借がないものは、絶無と言つてよいと思ひます。この世界は、神學者の說くところの半分ほども惡くはないと思ひます。新聞を見ても判りますが、他人を救濟したといふやうな美談の絶無な日は、殆んど一日もありません。もちろん他を蹂躙することばかりやつてゐる人もありますが、それよりかも、他を庇護つてやる人の方が遙かに優勢です。道學者のいふやうに、人類は次第に惡化するものではなく、一歩々々、向上進歩の路を辿りつゝあるやうに考へられます。

四、靈的體驗

前にも申したとほり、私は兩三度自分の肉體から脫出した經驗を有つて居ます。私は第一回目の出來事を、よく記憶して居ます。私は寢臺に横はつてから間もなく、自分の肉體が毛布にくるまつて寢て居る狀況を目擊して、獨語ました。『あんな寢樣をして居れば、眼をさました時に、左の腕がしびれて居るに相違ない……。』實際左腕が拙い恰好に置かれてゐたのです。さうする中に、私は數人の友人に逢ひました。その中のある者は、地上に居た時の友でありましたが、他は靈界と交通の結果、親交を結ぶことになつた人々であります。私はもちろん靈界の一來賓たるに過ぎませんが、しかし自由行動を執ることは、絶對に許されません。上から自分を保護する、無形の大きな手がありまして、それを脫れようとすれば、直ちに危險が伴ふのです。自分の前面には、青々とせる草原が、眼もはるかに擴がつてゐますが、しかし自分の辿る道は決つてゐて、自分が

前進するに連れて、一二間づゝそれが草原の中に自然に現はれて來るのです。

私はある所で、美しい花の數々を見ました。私はその一つを摘み取りましたが、不圖下を見ると、私の摘んだ花は依然としした其所に咲き誇つてゐるのです。餘り不思議なので、私は眼に見えない私の守護神に訊ねますと、その答は斯うでした。――『靈界には死といふことは全くない。いかなるものゝ生命をも奪ふことはできぬ。汝が摘んだのは、たゞ花の影に過ぎない。まことの靈的生命の根が殘る間は、花は飽までも花として殘る……。』

こんな話をおきゝになれば、靈界と物質界との差別點は、ある程度迄お判りのことゝ思ひます。靈界では歩むにも一歩々々と、かたみに足を運ぶのでなく、言はゞたゞ滑るのです。動くやうな感じもなければ、重いと思ふ感じもない。そのくせちやんと軀がある。私の顏を水溜りに映して見ると、それは格別只今有つてゐるこの顏と變つてもゐない。たゞ軀がいかにも輕くて自由であつて、百間位空中に跳び上らうと思へば、それしきのことは平氣で能きさうに思はれる。たゞ何者かに上から抑へられてゐるやうな氣がして、それを行らないまでゞあります。

一條の流れの彼岸には、人の住家らしいものも見えました。尤もそれを家屋と稱して可いかどうかは問題で、屋根もなければ壁もない。たゞ植物や花で蔽はれた、一の框らしいのです。遙かの遠方には、又巨大な建物の集りも見えましたが、くはしく査べた譯ではないので、それ等は恐らく公會堂式のものか、展覽會場式のものかと直感された位に過ぎません。建物の樣式は、何れもギリシヤ、ローマ風のものでした。その建物の附近には、少しも太陽の光線らしいものは見當りません。其所に見らるゝ光は、きら〳〵する白い燐光質の光で、スペクトルにかけても、とても判りさうにも思はれません。しかもその光は建物から反射されるのでなしに、建物自身から放散するらしいのです。

ある他の場合には、私はとある森の中を逍遙したことを記憶して居ります。しばらくその森を出拔けますと、其所には起伏せる黃綠色の平原がある。ちよつとした坂路をのぼりつめると、眼下に巨大なる窪地があつて、自然の圓戲場を爲し、いろ〳〵の皮膚、さま〴〵の國土の國民が、數十人づゝ團體をなして其所に坐つてゐる。そして其の向ふには、大絶壁が天を摩して立つてゐる……。やがてその絶壁の中から、白髮長髯の一老翁が歩み出て、そして講演を始めましたが、イヤその音聲の凉しく冴え亙つてゐることゝ云つたら、正に天下一品、一哩ほどの距離に在りながら、それがはつきりとすべての人々の耳朶に入るのであります。演題は人類發生の當初の事で、人間といふものは、一つの根源から表現してゐること、丁度雨の雫が雲の中から落ちるやい

に、一大精靈が生命素と云ふべきものを、世界各地に撒布したこと、それ等が次等に原始民族の細流を作り、やがて相結合して、最後に大民族を形成するに至つたこと等を述べました。『それ〴〵の國土は、それ〴〵の河流の如きもので、一大長流を作る前には、いろ〳〵の迂餘曲折を經ねばならぬ。故に人間に取りて常に必要なるは活動である、企業である……。』そんな意味のことを述べたのですが、もちろん一字一句をこゝに傳へることは思ひもよりません。

五、死後の急務

以上は單に私が靈界の賓客としての體驗譚であります。しかし私が死んだとなれば、勿論一時の訪問者としてゞなく、一の永住者としての覺悟を以て其所に赴きます。私は決して地上の生活を不足に思ふものではありません。地上に於て私は相當苦痛を味はつてゐますが、しかし他方に於てうれしい目にも逢へば、面白い事にも逢つてゐる。兎に角こゝもなか〳〵棄て難き世界であります。この上モウ二三十年こゝに住めと言はれゝば、私は歡んでこゝに住みます。私は何とかしてある種の娯樂、ある種の滿足を發見せずには措きませぬ。が、今晩この世を棄てよと言はれゝば、私はそれにも亦歡んで應じます。この世界よりか、もツと美しい世界に移住することです

もの、誰がその福音を歡迎せずに居られませう。地の世界に自分が果さねばならぬ義務が殘つてゐればこそ、私は無責任に逃げ出さうとしない丈のことであります。

それなら私が死んだら何をするか？　私は眞先きに『死』によりて分離された仲間との結合を企てます。即ち第一には、私より先きに歸幽した人達との再會をはかり、第二には私が後に殘して置いた人達との聯絡を講じます。私が心から愛する人々、私を助けてくれた恩人、私が依りにした人々と同時に、私を依りに思ふものども――私はそれ等をすツかり元の通りに結びつけることに努力します。私はそれ等のたゞ一人からとも、引離されて滿足しようとは思ひません。眞の精神主義とは協調和諧、相互扶助の謂であります。他から離れて山林にのがれたり、尼寺に引籠つたりするやうなことは、斷じてすべきではないと思ひます。

これと同時に、歸幽後の私は、直ちに死後の世界の規則の調査研究に着手するでありませう。物質界には物質界の規則があると同樣に、靈界には靈界の規則がある筈です。例へば幽靈の物質化現象にしましても、それを爲し得るのは、ホンの少數の靈魂の特技でありまして、何人も死ねば早速それが能きるものと思ふと、飛んだ間違です。微妙なる靈界の化學？に精通した靈魂のみの爲し得る仕業です。死後私しは、恐らく小學校の新入生と同じく、幾多の日新らしい學科に忙

私が死んだら！

殺され通しでせう。救濟だの洗禮だのといふものは、地上の神學者の作りあげたシャボン玉であつて、靈界の居住者に取りて、そんな眞似をしてゐる閑日月はありません。靈界は決して神變不思議の世界ではなく、法則と秩序とに司配さるゝ、一の儼乎たる世界であります。われ〳〵はその法則を修得し、之を遵守することによりてのみ、永遠の發達進歩を遂げ、すべてに表現せらるゝ造物主の限りなき愛を、少しづゝ會得することができてまゐります。（大正一五、三、一四）

神靈主義の放送講演

本年四年十三日金曜の晩には、世界神靈協會々長オーチン氏が、英國のビイ・ビイ・ジイから、死後の生存問題につきて講演放送を行ひ、ロッジ博士の場合にも劣らざる、大々的センセーションを與へたらしい。爰にその大要を紹介する。――記者

『死の關門を通過して彼岸に達した人達と、私が談話を交へたことは、幾百千回に上るか知れぬ。これにつきて疑を挿むのには、證據資料があまりに豐富であり過ぎます。從つてこの大事實を信ずるものが、よし廣き地球上に、自分只一人であつたとしても、自分の信念は斷じて動かうとは思ひませぬ。』

右は當夜の講演に於ける、數ある警句の中の一つであります。以てオーテン氏の意氣の、いかに熾であるかを知るに足りるでせう。オーテン氏は自己の體驗から說き起して、次第に話を進めました。――

『私は非國敎的空氣の中に育まれ、靑少年時代には、宗敎問題に關して、多大の疑惑に惱まされて居ました。私の觀る所によれは、宗敎の全部は、畢竟死後の世界の有無の上にかゝつてゐるとしか思はれない。われ〳〵の現世生活は、それ丈で完全なものか、それとも、それはより大なる圓の一缺片か？　若しも現世以外に生命がないとすれば、すべては倫理道德の問題であつて、宗敎の存在すべき餘地はない。すべての大宗敎の前提としては、何うあつても超現象的靈界の存在を必要とする。

『最初スピリチユアリズムの問題は、私の心に一種の疑惑と、輕蔑とを懷かしめましたが、しかしスピリチユリズムに關與せる私の友人は、何れも眞面目で、健全で、そして信賴すべき實業家でありました。が、交靈會に於ける實驗につきての彼等の物語を聽かされた時に、私は何うしても之を信用する事ができず、如かず、自分自身親しく交靈會に臨み、すべての虛僞を暴露してくれよう。――私はさう覺悟をきめたのでありました。

『忘れもしませぬ、私が二人の親戚に伴はれ、初めてカルジツフに於ける交靈會に臨んだのは、今を距ること四十餘年の昔、一八九二年二月のことでした。立會人は總計十六人、何れも中流の知識階級の人士ばかり、そして實驗室の燈火は、讀書に差支なき程度の明るさでありました。ところが、大型の胡桃の卓子が、何人も手を觸れないのに、空中高く浮き上つたのであります。私はステツキをとりて、卓子の前後左右上下を隈なく搔きまはしたが、卓子は依然として浮揚したまゝである。誰かゞ脚で支えるのを防ぐべく、立會人一同後ろ向きになつて跪いて見たが、卓子は矢張り落下することなく、數分間に亙りて空中に浮いたまゝであります。しかも更に意外なことには、右の卓子は何者かの命令によりて行動し、われ〳〵の注文した方向に向つて、自由に動くのみならず、數年前に歸幽した私の祖父の住所、姓名並に死亡年月日等を符徵で綴り、お負けに彼の年齡、職業、連れ添ふ妻の處女名等までも、明示して過らなかつた。私は勿論室內の大搜査を行ひましたが、しかしこの不可思議現象を說明すべき、何等の人爲的裝置をも發見し得なかつた。私の當惑のいかに多大であつたかは、何卒お察し下さい！　翌日私は荷車を傭ひて、右の卓子を借り受け、ある商店の秤にかけて見ましたが、それは實に八十四封度でありました。これが私の最初の心靈實驗であります。」

オーテン氏は更に進んで、二三の初期の實驗を物語つてから、言葉をつゞけました。――

『此等の實驗は私の心に、ドウあつても解釋を要する何物かゞ存在することを確認せしめ、爾來こゝに四十有餘年に亙りて、連續的に心靈問題に關する讀書と、實驗とに微力を捧げましたが、お蔭で私は無盡藏の歡喜幸福に浴し、生命の背後に控へてゐる智慧と、目的とに關して、一切の疑惑を掃蕩することができました。お蔭で現在の私は、自分の永遠の來世生活につきて、一點の疑ひをも懷いて居りません。

『數へて見れば、私が心靈實驗に臨んだ回數は、四千回以上にのぼります。それ等の中には隨分單純極まる、下らないのもありますが、同時に又極度に嚴密なる、科學的統制下に行はれたのも澤山あります。全然暗黑裡に執行された實驗は、僅々百回に達しません。勿論心靈現象の或るものは、暗中に於て容易に好成績を擧げ得ることは事實であります。が、私は暗黑裡の實驗を好みません。私はたゞの一度も、友人以外の人達と、暗中に坐つた經驗がない。私の觀る所によれば、暗黑裡の實驗は、議論の種子を除去するよりも、寧ろ議論の種子を蒔く傾向を有し、決して不動の信念を樹立する所以でないと思ふ。私は自己の經驗上、明るみの裡で、立派にあらゆる種類の心靈現象に接し得る自信を有つて居ります。

『ところで、此等諸種の現象中、その五割までは、靈魂の存在を證明する資料とはならないといふのが、蓋し正當でありませう。殘る五割の中、その二割五分までは、靈魂說と他の諸說（讀心說、潛在意識說等）との去就を決すべき、確實な材料とはならないでせう。が、それ等すべてを控除し去りましても、後には儼として地上の人間以外の存在を肯定すべき、完全無缺な資料が確實に殘ります。私は斷言します、私の四十餘年の研究の結果、死者の靈魂がわれ〳〵地上の人間と交通を行ふことは、絕對に確實であると。』

こゝに至りてオーテン氏の音吐はいよ〳〵冴え、盤石不動の信念の籠れる聲を强めて、絕叫しました。――

『死の關門を通過して彼岸に達した人達と、私が談話を交へたことは、幾百千回に上るか知れませぬ。これにつきて疑を挿むのには、證據資料があまりに豐富であり過ぎます。從つてこの大事實を信ずるものが、よし廣き地球上に自分只一人であつたとしても、自分の信念は斷じて動かうとは思ひませぬ。私は靈視的に死者の姿を目擊しました。私は列席の他の何人にも知られてゐない、有力正確な通信を死者から受取りました。私は嚴密なる條件の下に、死者の寫眞を撮りました。私は石油燈、瓦斯燈、電燈並に白晝の日の光の下で、物質化せる死者の姿と言語を交へ、

又之を抱擁しました。私は死後の生命の存在を信ずるのでなくして、之を知つて居るのである。私は他界の居住者と、何回となく直接に言葉を交へた。そしてそれ等の居住者の少くとも一部分は、現世からの移住者であることを確かめた。こればかりは、いかに之を認めまいとしても、到底認めぬ譯には行かぬほど、その證據が決定的なものであります。』

オーテン氏は爰で例の詐術說に對して、學術的批判を與へた後で、家庭交靈會の甚大なる價値を力說しました。——

『實をいふと、私自身は殆んど職業的靈媒との交渉を有ちません。第一の理由は貧乏で謝禮が出せない爲め、第二の理由は自分の家庭に於て、親族朋友と共に心安く研究をすゝめたいと思ふからであります。この四十年間に、私が靈媒に支拂つた金額は、總計十磅にも達しないと考へます。が、自宅又友人の家庭に於て實驗した現象の種類と、性質とは、いかなる職業的靈媒の交靈會に於けるよりも、遙かに優れて居ります。私は決して職業的靈媒を貶すつもりはない。要するに人物次第、技倆次第で、彼等の中には困難なる條件の下に、優良な成績を擧げつゝあるものも決して少くない。詮ずる所、すべては自分の懷中と、便宜と、相談ものでありますが、大體に於て自分が直接苦勞した仕事の方が、身にしみることは事實であります。』

それからオーテン氏は自分の結果をまとめて、斯く論斷しました。——

『われ〳〵の地上生活は、言はゞ生命の單なる序曲に過ぎない。嚴密に言へば、われ〳〵は死後に於て、初めて眞の意義ある生活に入るのであると言つてよい。私が死者と試みた數々の對話から考ふれば、死はその人の性格と、能力の上に、何等急激の變化を及ぼすものでない。彼は地上でかき集めた精神的素養を携へて、單に他界の生活に入るまでゝある。信仰の如何は、それが地上生活に於て、どれ丈の影響をその人に與へたかの問題たるにとゞまり、甲の宗教が乙の宗教に優るといふが如き事は絕對にない。』

オーテン氏の態度が、いかに公平無私であり、又その觀察がいかに深刻無比であるかゞ判るではないか！　我田引水式の宗教職業家達の、到底企及し得る限りでない。彼はつゞいて、心靈研究の必要につきて力說した。——

『グラドストーン氏は、心靈研究を以て、世界に於ける最重要の問題であると喝破したが、私もこれに同感であります。何となれば、人間に取りて最も確かな二大事實があるからであります。外でもない、第一は人間が現世に生れ出でたこと、第二は人間がやがて現世を見棄てねばならぬことであります。人間の地上生活は僅かに七十年の短日月、永遠の大太陽上の一斑點にも及

ばない。その生涯を日常の雜務に獻ぐることを以て、最も實用的なりと思考する、かの一部の人士の如きは、實は無類の近視眼者である。何となれば彼の地上の一生は、彼の永遠の實生活に比して、眞に九牛の一毫に過ぎないからである。私は超現象の世界が、われ〳〵を包圍してゐることを確認して居る。その世界には、死の關門を通過したものが全部居住して居る。死は斷じて終點ではない！　それは單なる乘換驛である。そしてわれ〳〵はその乘換驛に於て、七十年の現世生活中に集積した、下らない手荷物の九割以上を放棄せねばならないのである。われ〳〵が乘換後に携帶を許さるゝものは、われ〳〵が現世で築き上げた人格、又われ〳〵が現世で蓄積した記憶――要するに最も貴重なる無形の手荷物のみである。』

彼は進んで死の科學的意義を概說した。――

『之を一言にして盡せば、死は物質的肉體と、超物質的エーテル體との分離作用に過ぎない。地上生活中にも、此等二種類の體は互に交錯作用を營み、その程度は各人各樣であります。そして丁度一疋の幼虫が蛹となり、つゞいて胡蝶となるが如く、われ〳〵はやがて肉體を放棄してエーテル體に宿ります。エーテル體は多くの點に於て肉體に似て居りますが、しかし肉體に比し遙かに輕快であり、從つてより大なる自由をわれ〳〵に與へます。で、私から觀れば、死は毫も恐怖すべき何物でもない。私は寧ろ一の興味ある冒險として死を歡迎します。兎に角、われ〳〵は、生命の連續性を確認しつゝ、以て現世生活に處することが何よりも大切であります。因果律は生死の巷を越えて嚴守されるのであります。この際自分の信奉する教義は、問題とするに足りない。自分の實際送りつゝある生活――これがその人の永久の評價點となるのであります。

『近代神靈主義が、各時代に現はれた奇蹟と、信仰とに解釋を與へ、生命を與へることは事實であります。が、近代神靈主義は、それ自身に於て一個の獨立したる信仰であり、又哲學であり、私としては、他の何物の援助を借りる必要を認めません。近代神靈主義は、いかなる智能の批判にも堪へ、いかなる心情の要求にも滿足を與へて來ました。之を要するに過去の文書の一切が、人類の記憶から掃蕩され、破毀されたとしても、私の宗教的信念は、これが爲めに微塵も動搖を來さないのであります。さう言つた堅き信念の所有者は、わが英國のみに於て、實に千を以て數へることができます。』

最後にオーテン氏はかく結論しました。――

『私は斷じて他の信仰を誹謗するものではありません。人類が大小高低、さま〳〵の發達狀態に分れてゐる以上、それ等の人達の宇宙人生觀は、各種各樣に分れる筈で、畢竟信仰は各人の自

由であります。私はたゞ自分自身が、近代神靈主義の七大綱領に據りて生きるものであること、又自分自身と同じく、この神靈主義を信奉するものが、ひとり英國のみならず、全世界を通じてます〳〵增加しつゝあることを、皆樣に御傳へする丈であります。神靈論者としてわれ〳〵の先輩である、フランスの大ヴイクトル・ユーゴーは、かく述べました。――自分がいよ〳〵墓場に入る時、これで自分の日課は終つたとは言へるが、これで自分の生命が終つた、とは斷じて言ひ得ない。仕事はすぐその翌朝から開始される。墓場は袋路でなくして、往來である。肉の眼を閉すのは、やがて曉を待ちて靈の眼を開くが爲めであると。私はこの大ユーゴーの言葉を借りて私の講演を結ばうと思ひます。」（昭和九、七）

神靈主義とは何ぞや

アーネスト・オーテン

この一文は畏友オーテン氏が其主宰する、ツー・ウアールズ（一九三四年十月二十六日）誌上に發表したもので、通俗的のものではあるが、例によつて、甚だ歎ぶべき暗示に富んで居る。爰に大要を譯出して讀者の參考に資する。――譯者

神靈主義とは、そも〳〵何を意味するか？　私の觀る所によれば、神靈主義とは死の關門を通過したる、彼岸の人靈と通信を行ひ、更に進んで、より高き世界の、より完全に發達したる超人間的存在者との、靈的交通に導く所の一の思想體系であると思はれる。

右の通信は、既成宗教者流の主張せる如く、何等特殊の神の恩寵に基くものでなく、天賦的に

大自然に備はり、從つて人間の天性にも備はるところの法則と、能力とに基調を置くものである。即ち神靈主義の根柢は、地上の人類が、この身この儘で、すでに永遠の生命を有する靈的存在であり、從つて彼自身の中に、向後ますゝ發達を遂ぐべき靈智靈能の種子が、立派に存在してゐるといふのである。さう言つた能力が人間に備はつて居ればこそ、彼は自己の器量次第で、遙かに高き世界の居住者達との交渉をも起し得る譯なのである。

右の思想の正しい事を證明すべき現象は、間斷なく人間界に現はれ、決してある特殊の時代、場所、又は人種等に限られない。歴史はもとより、歴史以前の記念碑その他を見ても、入神、靈夢、靈象、神の聲、物品浮揚、物質化、その他さま〳〵の異常現象が起りつゝあつたことを立證すべき記錄が、無盡藏に見出される。

ともすれば思慮の足りない人達は、神靈主義を以て、原始時代の遺物だとか、幼稚極まる迷信だとか言つた漫罵をあびせる。が、私の觀る所によれば、近代神靈主義は、斷じて混沌として纏まりのない、異常現象の單なる集積ではなく、專ら實證的の諸現象を原料として、一歩々々に堅實なる人生の指導方針を見出さんとしつゝあるところの、一の系統的原理である。

かるが故に近代神靈主義には、新らしき或物——斷然新らしき或物がある。神靈主義以前にありては、一切の異常現象は、たゞ神變不可思議なもの、神が人事に對して、氣まぐれな干渉を試みた結果であるとした。かの太古時代の人民の如きは、一切の心靈現象を以て、畢竟神樣の御機嫌の善惡を推察すべき、一の手懸りであるとしたり、又は或る特殊の豫言者的人物の專賣品であるとしたりした。之に反して近代神靈主義は、全大宇宙を貫いて、そこに一定の法則と秩序とがあり、そしてそれ等は俗界、物質界に於けるが如く、精神界、宗教界にも亦嚴守せられて居るといふことを主張する。

神の特殊的干渉の如きは、元より問題外である。何となれば、それはたま〳〵神智神力の不完全不徹底を意味する以外の何物でもないからである。この世に起るあらゆる現象は、事物の本質に內在する法則と、能力との所產であり、從つて同一の境遇と條件とを與へらるれば、必然的に同一の現象が發生するに決つてゐる。で、近代神靈主義は、取りも直さず、物質界と精神界との間に起る、交渉關係を明らかにする所の科學であり、しかもそれは過去の出來事のみにつきて攻究する所の、比較宗教學の如き科學でなく、今も昔も變ることなき、宇宙の法則を究明すべく、吾人の眼前に提供せらるゝ生きた事實と、現象とを仔細に觀測し、又分析する所の科學なのである。

かゝる次第で近代神靈主義は、又地上の人類と、他界の超人間的存在との間に起る出來事の考察を目標とする、一の大自然主義ともいへるし、同時にそれは又過去及び現在に於ける。人間の心靈的、又精神的經驗に向つて攻究を行ふ所の、至純至粹の合理主義であるともいへる。

心靈現象の中には、隨分奇妙不思議な異常現象が存在することは事實である。が、それは斷じて超自然現象ではない。若しそれ現代の一般的傾向からいへば、異常現象から、普通現象への移りかはりは極めて迅速である。氣囊式の安全タイヤは、曾て異常品であつたが、今日では平々凡々の通常品である。ローガンベリー種の苺は、曾て異常果物であつたが、今日ではどんな栽培家でも造り出す通常品である。

かるが故に、古代神靈主義とは、全然その立場が相違する。前者にありては、心靈現象を以て、超自然的神的介在の證明としたが、後者にありては、それ〴〵異なれる世界の居住者間に行使さるゝ所の、自然法則の現はれに外ならぬと考へる。

兎も角も神の特殊的干渉といふ考へが除去されたお蔭で、爰に新らしい觀念が發生して來た。外でもないが、それはわれ〳〵人間界の仕事に對して加へらるゝところの干渉は、われ〳〵と同樣に、宇宙のどこかに居住する所の或物——他界の居住者の所作であらねばならぬといふ事、從つてすべては不定不變の法則に基づきて、物と力とを運用する結果であらねばならぬといふ事である。今日それが事實である以上、過去に於ても勿論それは事實であつたに相違ない。たゞ古代と現代とで、解釋の仕方が違ふのである。時代につれて、人間には常に何等かの新要素が加はりつゝある。間斷なき向上、間斷なき進歩——そこに多少の例外はあるとしても、人間の知識と力量とは、次第に進歩して行き、從つて人間が天然力を利用し、又統御する力は、次第に巧妙になりつゝある。見よ人間の意識の範圍は、一代又一代と、漸次その領域を擴めつゝあるではないか。かの感受性にしても、それはだん〴〵強まつて行く傾向がある。文化的な近代人の痛みに對する感受性は、野蠻な古代人より遙かに鋭い。同樣に、快樂又は幸福に對する感受性も、近代人ほど強烈である。爰が古代と現代との相異である。近代神靈主義は、近代にして初めて完成し得る性質のものである。

心靈研究の勃興は約八十年前、フォックス家の怪異現象を紀元とするが、私見にして誤らずんば、あれは決して偶發的の事柄でもなければ、又二三少數の他界の居住者の出來心から、徒らに釀成された孤立的の問題でもなく、實に偉大高邁なる多くの神靈達が、熟慮詮考の上で斷行するに至つた、一の計畫的大運動、所謂天來の大機運であると思考されるのである。幽明交通の衝に

當つた當事者達は、恐らく言はゞ單なる道具、單なる傀儡に過きず、自身では右の計畫、右の機運の何であるかを知らずに居たのでもあらう。蓋し幽明交通といふ仕事は、非常に複雜深遠を極め、到底下級靈などの、微弱なる力量で實行し得べき性質のものではない。若しそんな簡單な仕事であつたら、幾世紀にも亙りて、顯幽兩界間の關門が、殆んど全く閉鎖されて居た筈がない。

私は幽明交通が、世人の想像以上に、世にも複雜な、そして世にも神聖な仕事であらねばならぬと確信するものである。われ〳〵が直接通信を受けつゝある他界の住人の如きは、蓋しこれにつきて殆んど何も知らない。幽明交通の鍵は、常に奥の奥の偉大なる神靈によりて握られて居るのであらう。（昭和一〇、一）

月刊
心靈と人生
毎月　一回　一日發行
定價金廿五錢送料一錢
□心靈の科學的研究と神靈主義の機關として斯界に君臨する唯一の特殊雜誌
□創立以來茲に十有八年內外の心靈事實又これに關する權威ある研究の紹介にかけて正に斯界の權威

昭和十六年十一月一日印刷
昭和十六年十一月五日發行
【定價金參拾五錢】
著者　淺野和三郎
濱濱市鶴見區北臺二三六六
發行者　淺野多慶
東京市芝區田村町三ノ五
印刷者　脇長男
東京市芝區田村町三ノ五
印刷所　診療社印刷部
不許複製
發行所　横濱市鶴見區北臺二三六六
心靈科學研究會出版部
振替東京六三四八二番
發賣所　東京市麹町區平河町二ノ二三
心靈科學研究會事務所
電話九段(33)二三九五番
振替東京一六七六二二番
配給元　東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

117
322

最新刊書

淺野和三郎著

心靈學より日本神道を觀る

四六版　美裝　二一四頁
定價金壹圓・送料金九錢

□本書の目次は神社と祈願、祈願の意義、日本神靈主義と祭祈、再生說と古神道、國家の守護神、日本民族の使命と信仰、天孫降臨の神勅、信仰の對象、メースン氏の神道觀につきて、靈媒の話、靈媒の取扱方につきて、筋の通らぬお國自慢、審判者の悲喜劇、神靈主義と神社問題、不徹底な祖神崇敬の十五篇より成る。

□右の各篇は、相互關聯を保ちつゝ、心靈見識の下に日本の神の道を說いたもので、本書によりその幽微な祕奧が始めて闡明されたといつても過言ではない。

淺野和三郎著

歐米心靈行脚錄

四六版　美裝　二二五頁
定價金壹圓參拾錢・送料金九錢

□今より四十年もの昔、淺野氏はスケッチ・ブックの名譯を以て、文名を當時の讀書子間に馳せた。

□其の後氏は心靈研究に心身を捧ぐる事二十餘年。その結實が數卷の心靈著書となつてゐる。

□斯かる裡にも、氏は『世界神靈大會』に、日本神靈主義者を代表して出席する機會を得、氏をして世界人としての名譽を荷ふに至らしめた。

□本書はその紀行文なるが、滋味津々一讀卷を蔽ふに遑なからしめ、昔ながらの淺野氏を甦らせた觀がある。又世界神靈學界の狀況を序して大勢を明らかならしめて居る等、他に類書を絕つ。

終